



A proposal for lexical derivation : 副詞の修飾機能めぐって

著者	山内 信幸
雑誌名	主流
号	48
ページ	89-104
発行年	1987-02-20
権利	同志社大学英文学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000014984

A PROPOSAL FOR LEXICAL DERIVATION

—副詞の修飾機能をめぐって—*

山 内 信 幸

I 序 論

現在の統語論の枠組みの中で、複雑多岐な特性を有し、“uncharted swamp”とか“catch-all term”と称される副詞に明確な位置づけを与えることは、極めて困難なことのようと思われる。文中での副詞の意味を決定する際には、副詞そのものの持つ意味は言うまでもなく、副詞を取り巻く文法環境、動詞の意味、韻律・ピッチ・抑揚などの syntax, semantics, phonology といった分野の要素のみならず、語用論的な要素も考慮に入れる必要がある。

本稿では、統語構造が意味構造に重要な役割を果たしていることに鑑み、Bolinger (1952) の“linear modification”という概念を援用しつつ、(1) 各副詞が生起する位置が、副詞の意味決定にどのような影響を及ぼしうるのか、(2) 副詞を取り巻く文法環境として、副詞と主語や動詞との関連性はどのようなかについて論ずることとする。

修飾機能の多様性を考察する場合、例えば、*bitterly* という副詞がどのような意味で使われうるのかを示すと次のようになる。

- (1) a *Bitterly*, he buried his children. (subject adjunct)¹
 b He spoke *bitterly* about the treatment he received. (manner adjunct)
 c He *bitterly* regretted their departure. (intensifier)

上記の例からも明らかなように、*bitterly* という副詞は、subject adjunct、

manner adjunct, intensifier といった様々な修飾機能を備えていることがわかる。

本稿では、便宜上、様態・程度・強意の副詞及び文修飾副詞を手がかりにして、従来なされてきた形容詞から副詞を派生させるという分析ではなく、副詞を独自に（語彙的に）派生させるという立場を採ることにする。

II 変形による派生の分析に伴う不備

1 従来のアプローチ

伝統文法あるいは構造主義文法において、形容詞と副詞との関連性が、強く前面的に意識されるようなことはなかったように思われる。生成文法において、Kuroda (1968) や Schreiber の一連の研究 (1969, 1971, 1972)² などによって、また、非生成文法論的アプローチにおいて、Greenbaum (1969)³ や Quirk *et al.* (1972, 1985) などによって、副詞は形容詞から変形で派生させるべきであると主張されてきた。

変形文法論的アプローチを支持すると、基底規則とレキシコンから Adv という範疇が除外でき、また、基底部門において他の簡略化が得られるという利点があるが⁴、Jackendoff (1972) や Bellert (1977) などは、副詞を深層の形容詞から派生させるという分析に反論を唱え、基底部門で派生させることを提案している。

一見すると、変形に基づく派生によって、形容詞と副詞との間の関連性について有意義な一般化がなされるように思われるが、次節において、変形による分析に伴う幾つかの問題点を考察してみることにする。

2 問題点

まず、一般に副詞を示す標識であると考えられている接尾辞の *-ly* の付加という点で形容詞と副詞との対応を考えてみた場合、次のようなグループ分けが可能であると思われる。

- (i) 形容詞に *-ly* を付けた副詞で意味の変わらないもの : (slow-slowly, evident-evidently, happy-happily)
- (2) a He was making *slow* progress in English conversation.
b He was making progress *slowly* in English conversation.
- (ii) 形容詞に *-ly* を付けた副詞で意味の変わるもの : (hard-hardly, near-nearly, late-lately)
- (3) a He is a *hard* worker.
b He *hardly* works. (cf. He works *hard*.)
- (iii) 形容詞及び副詞が *-ly* で終わり, 意味の変わらないもの : (kindly-kindly)⁵
- (4) a He had a *kindly* interest in me.
b He treated his horse *kindly*.
- (iv) 形容詞及び副詞が *-ly* で終わり, 意味の変わるもの : (cleanly-cleanly)
- (5) a She has a *cleanly* habit.
b He cut the tree *cleanly*.

従来のように, 深層の形容詞に *-ly* を付加して副詞を派生させるという立場を採ると, (2) 以外はすべて, その反例ということになる. すなわち, (3) においては, 形容詞と副詞との間に意味的な対応は見られず, また, (4) においては, 副詞を示す標識であると考えられている *-ly* という接尾辞が, 形容詞にも付加されていて, さらに, (5) においては, 形容詞と副詞が同形でありながらも, 意味的变化が見られる. これらの例は, 形容詞を基幹として副詞を派生させるという分析への十分な反証となりうるものと思われる.

次に, パラフレーズの問題を考えてみると, 変形文法論的アプローチでは, 次の各文における副詞は, それに対応する深層の形容詞から派生され, 各文は意味的に等価なものと考えられている.

- (6) a John disappeared *elegantly*.
 b John disappeared in an *elegant* manner.
 c John disappeared in a manner which was *elegant*.⁶
- (7) a *Certainly*, he has little money.
 b It is *certain* that he has little money.
- (8) a *Fortunately*, Burrows was elected.
 b It is *fortunate* that Burrows was elected.
- (9) a *Prudently*, they left it out.
 b It was *prudent* of them to leave it out.
- (10) a *Reportedly*, they have taken that job.
 b It is *reported* that they have taken that job.

しかし、一方で、次の (11) ~ (21) の各例は、パラフレーズの不十分性あるいは意味的不等価性を示すものである。

まず、すべての副詞が、It is / was ADJ that ... という形容詞を基幹に持つ型にパラフレーズできるとは限らない。

- (11) a It's $\left\{ \begin{array}{l} \textit{bad} \\ \textit{nice} \end{array} \right\}$ that he doesn't have a job.
 b $\left\{ \begin{array}{l} * \textit{Badly} \\ \textit{Nicely} \end{array} \right\}$ he doesn't have a job.

さらに、これと関連して、(12a) では、modality を表わす形容詞に否定詞及び否定を表わす接頭辞が付加されているが、それに対応するような副詞形は、意味的に等価なものとして使うことができない。

- (12) a It is $\left. \begin{array}{l} \textit{improbable} \\ \textit{impossible} \\ \textit{uncertain} \\ \textit{not evident} \end{array} \right\}$ that John will come.
- b $\neq \left. \begin{array}{l} \textit{Improbably,} \\ \textit{Impossibly,} \\ \textit{Uncertainly,} \\ \textit{Not evidently,} \end{array} \right\}$ John will come.

また、文副詞の中のいわゆる style disjuncts 以外は、疑問文や条件節などにおいて生起できないことが報告されているが⁷、それに対応する形容詞を伴ったそれぞれの b の例文は、十分に容認可能なものである。

- (13) a **Interestingly*, has Jim written a sonnet?
 b Is it *interesting* that Jim has written a sonnet?
- (14) a **Possibly* will they leave early?
 b Is it *possible* that they will leave early?
- (15) a *If *possibly* the report is true, I will agree with you.
 b If it is *possible* that the report is true, I will agree with you.

さらに、文副詞における階層性に関しては、Nakajima (1982) 及び Yamauchi (1986) などにおいて指摘されているように、いわゆる evaluative adverbs の方が⁸、modal adverbs よりも上位に属すると考えられている⁸。この原則に従うと、(16b) が容認不可能となることは明らかであるが、(16b) の *certainly* に対応する形容詞を含む (16c) は容認可能な文となる。

- (16) a *Fortunately*, Mary *certainly* succeeded in the exam.
 b **Certainly*, Mary *fortunately* succeeded in the exam.
 c It is *certain* that Mary *fortunately* succeeded in the exam.

同様の観察が、様態・程度の副詞のパラフレーズにも見られる。(6)において指摘されたように、それぞれの副詞は、それに対応する深層の形容詞から派生させると一般に考えられているが、次の(17)～(20)は、変形による派生が妥当でないことを示している。

- (17) a She put the cards down in a manner which was *unbelievable*.
 b She put the cards down in an *unbelievable* manner.
 c *She put the cards down *unbelievably*.
- (18) a *John disappeared in a manner which was *happy*.
 b ?John disappeared in a *happy* manner.
 c John disappeared *happily*.
- (19) a *It is *naturally* that he writes a letter.
 b It is in a *natural* way that he writes a letter.
- (20) a *It is *thoroughly* that they disapprove of his methods.
 b It is to a *thorough* extent that they disapprove of his methods.

さらに、次の(21)及び(22)の各文を見てみると

- (21) a their *great* admiration for his music
 b They *greatly* admire his music.⁹
- (22) a their *complete* failure in the attempt
 b They *completely* failed in the attempt.

(21a), (22a)において、いわゆる「程度」を表わす attributive な形容詞が、(21b), (22b)において、「程度」というよりはむしろ「強意」の意味に変化している。これは、「変形は意味を変えない」という大原則に明らかに違反するものであり、(21)及び(22)の各文を変形によって関係づけるのは妥当でないと見えよう。

以上見てきたように、形容詞から副詞を変形で派生させる分析に伴う不

備が幾つか指摘された。次章では、その代案として、副詞の語彙的派生を提案し¹⁰、副詞の意味を決定する際に、表層構造における副詞の生起位置及び主語や動詞との関連性が、如何に重要な役割を果たしているかを考察することにする。

Ⅲ 語彙的派生の提案

1 修飾(modification)の概念

“adverb”の“ad-”という接頭辞が示すように、副詞というものは、動詞(もっと厳密に言えば、被修飾部)に「付加された (added)」要素と考えられている。例えば、(23)において、(23b)は(23a)よりも、Tomの家の出の仕方を詳しく記述していると言える。一方、(23c)は、様態を示す副詞が使われているにもかかわらず、意味的に intelligible なものとは考えられない。

- (23) a Tom ran away from home.
 b Tom ran away from home *secretly*.
 c ?Tom ran away from home *beautifully*.

もし、この事実を文法的に説明しようとする、“run away”という動詞句のかなり精緻な厳密下位範疇化及び選択制限を規定しなければならなくなることは自明であり、レキシコンがかなり複雑になることが予想される。

そこで、(23b)は(23a)に *secretly* という副詞が付加されて生成されたものではなく、“run away”というVPがとりうる有限の可能な副詞の組から、*secretly* という語が「抽出された (extracted)」ものであり、(23a)の中には、潜在的に“run away *secretly*”という読みも含まれているものと考え、レキシコンの過剰な膨張を防ぐことはできる¹¹。

本稿では、表現形式における副詞の役割をいわゆる「付加 (addition)」ではなく、「抽出 (extraction)」と定義し、以下、論を進めることにする。

2 副詞の生起位置

副詞の生起位置に関して、厳密な意味での一般化は、かなり難しいように思われるが¹²、原則的には、修飾すべき語(句)の近くに生起するため、表層構造における副詞の位置が、副詞の意味・役割を規定する上で、極めて重要な役割を果たしていると言える。

本稿で取り上げている副詞に関して、Greenbaum (1976) によると、次のような位置が最も好まれる位置とされている¹³。

- (24) a Initial Position:
- most attitudinal disjuncts
- b S-V Position:
- disjuncts evaluating the content of the event and also the agent
 - amplifier intensifiers
 - subject adjuncts [subjuncts]
- c Final Position:
- manner adjuncts¹⁴

例えば、*sadly* という副詞に関して言えば、上記の傾向を踏まえて、次のような位置に生起する。

- (25) a *Sadly*, they sent in their resignation last week. (evaluative disjunct)
- b They *sadly* signed the death-warrant. (subject subjunct)
- c He reacted *sadly* to the news of the accident. (manner adjunct)
- d He was *sadly* mistaken. (intensifier)

また、Bolinger (1952) の言う「線状的修飾の原則 (the principle of linear modification)」は、右方向のみならず、左方向にも作用するので¹⁵、

例えば, (25b) 及び (25c) の *sadly* は,

(26) *Sadly*, they signed the death-warrant.

(27) *Sadly*, he reacted to the news of the accident.

のように, Initial Position に生起しても容認可能である¹⁶.

3 修飾構造

(25) で取り上げたそれぞれの副詞が修飾しているのは, 概ね, 次のようなものと考えられる¹⁷.

(28) a evaluative disjunct:

全文によって示される「事実」や「出来事」を修飾する。(さらに, この副詞は「発言内容に関する話者の評言」¹⁸も表わす.)

b subject subjunct:

主語及び主語が行なっている「事」を修飾する.

c manner adjunct:

動詞 (句) によって示される「行為」を修飾する.

d intensifier:

形容詞・動詞・前置詞句に内在する「程度」を修飾する.

以上のことを図示すると, 次のようになる.

(29) a *sadly* in (25 a)

(evaluative disjunct)

```

graph TD
    A["(evaluative disjunct)"] --> B["?speaker"]
    A --> C["fact or event"]
    B --> C
  
```

(denoted by sentence)

- b *sadly* in (25 b)
 (subject subjunct)
 / \
 subject event (denoted by VP)
- c *sadly* in (25 c)
 (manner adjunct)
 |
 action (denoted by VP)
- d *sadly* in (25 d)
 (intensifier)
 |
 adjective/ verb/ PP¹⁹

次に、副詞の意味を決定する要因として、副詞を取り巻く文法環境としての主語や動詞の特性が如何に作用しているかを考察してみる。

まず、evaluative disjuncts に関しては、主語や動詞にほとんど制限なく生起できる。

- (30) a *Sadly*, he offered them his kind assistance.
 b *Sadly*, I am very happy.

一方、subject subjuncts に関しては、主語や動詞の特性と密接に関連しているように思われる。要約すると

- (i) 主語において、animate subject または personal agentive subject をとる²⁰。
- (31) a Terry *sadly* opened the letter.
 b *The rain *sadly* fell.
- (32) a The doctor *sadly* examined John.

- b ? John was *sadly* examined by the doctor.
- (ii) 動詞において, intensive verbs, stative verbs 及び, achievement verbs とは共起しない²¹.
- (33) a *Mary *sadly* was poor. (intensive verb)
 b *Marine *sadly* depended on Simon. (stative verb)
 c *He *sadly* botched the operation. (achievement verb)

次に, manner adjuncts に関しては, 様態を記述する動詞 (すなわち, その行為がどのようになされるかを示す動詞) と共起する.

- (34) a She whispered *sadly*.
 b *He has known her *sadly* for three years.

最後に, intensifiers に関しては, gradability を示す動詞・形容詞などと共起する²².

- (35) a He *sadly* botched the operation.
 b She was *sadly* aware of his shortcomings.
 c *John *sadly* ran away.
 d *The atom was *sadly* ionized.

以上, 副詞というものは, 形容詞との形態論的, 意味論的関連性のある程度認めるにしても, 言語事実として, 語彙的に派生させる方が妥当であり, また, 副詞の意味・機能は表層構造における生起位置及び主語や動詞の特性といった文法環境に大きく影響を受けるということを見てきた.

IV 結論

いわゆる修飾語というものは, 被修飾部の近くに置かれ, 英語においては, left-to-right order に従って, 通常, 被修飾部の右に置かれる傾向があるが,

Bolinger (1952) が指摘するように、「線状的修飾の原則」に従って、その左にも置かれうることもある。

本稿で、副詞の機能を「付加」ではなくて「抽出」というようにとらえたのは、次のような言語事実を説明しようとするためであった。例えば、“run away”という動詞句に関して言えば、

(36) run away *quickly*/ *slowly*/ *wearily*, etc.

のような表現は可能でも、例えば、

(37) *run away *beautifully*/ *violently*/ *successfully*, etc.

などは、容認不可能な表現として排除される。この事実を説明するには、“run away”という動詞句のかなり精緻な厳密下位範疇化を試みなければならず、仮にそれがなし得たとしても、レキシコンでの“run away”に関する記述が、かなり複雑なものになることが予想される。それよりは、“run away”という動詞句が内在的に持ちうる有限の可能な副詞の組、ここでは、例えば、*quickly*や*slowly*のような副詞の組から任意の一つの変項 (variable) である *quickly* という副詞が抽出されて、

(38) He ran away from home *quickly*.

という文が生成されたと考えるわけである。言い換えれば、

(39) He ran away from home _____.

の“run away”の中に、共起しうる副詞が潜在的に含まれているとみなすわけである。

以上のことをまとめて図示すると、(40) のようになる。

(40) a *Unfortunately*, I don't understand him.

[Sub VP]_s (⊙, β, γ, δ...)²³

- b He *miserably* signed the death-warrant.

[Sub (α, ⊙, γ, δ...)] VP]_s

Sub: [+ animate and agentive]

VP: [- intensive, stative, or achievement]

- c He reacted *sadly* to the news of the accident.

[Sub VP (α, β, ⊙, δ...)]_s

VP: [+ manner]

- d He was *sadly* mistaken.

[Sub VP (α, β, γ, ⊙...)]_s

VP: [+ gradable]

上記の図は、各々、有限の可能な副詞の組 (α, β, γ, δ, ...) が被修飾部に潜在的に組み込まれていて、それぞれ、表現形式として、任意の一つの変項が抽出されて、生成されたものであり、かつ、VPの特性をも記述したものである。

以上、副詞を変形ではなく、語彙的に派生させることを提案してきたが、今後の課題として、言語記述において、形容詞や副詞などの統語範疇の目録が必要なかどうか、また、もし必要なら、どのように表示されるべきなのか、形容詞や副詞の本質的特性はどのようなものか、さらに、言語にとって、一体、修飾 (modification) とは何かについてのもっと深い考察が必要となってくるであろう。

注

* 本稿は、第23回表現学会全国大会 (1986年5月24日) で口頭発表したものに補筆修正を施したものである。

1 Jackendoff (1972) は、“subject-oriented adverb”と呼び、また、Ernst (1984) は、文法的主語と必ずしも一致しないということから、“agent-oriented adverb”と呼んでいるが、以下の各副詞の呼称に関しては、Quirk *et al.* (1985) に拠ることにする。詳しくは、Randolph Quirk *et al.*, *A Comprehensive Grammar of the English*

Language (London: Longman Group Ltd., 1985), pp. 501–603 を参照のこと。

- 2 Schreiber (1969) は、変形文法論的アプローチの妥当性を次のように述べている。

The justification for such a derivation [i.e. deriving sentence adverbs transformationally from deep structures that also underlie certain adjectival constructions] will be shown to be that sentence adverbs share identical co-occurrence restriction with the predicate adjectives of certain sentences that can be considered related to sentences containing sentence adverbs. . . . A further justification of such an analysis is that it becomes possible to state naturally an important constraint on the class of possible sentence adverbs; that is, the set of possible adverb stems can be defined as being a subset of the class of adjectives. . . .

Peter A. Schreiber, *English Sentence Adverbs: A Transformational Analysis* (Ann Arbor, Michigan: University Microfilms, Inc., 1969), pp. 6–7.

- 3 Greenbaum (1969) などでは、「変形 (transformation)」という概念ではなく、「対応形 (correspondence)」という概念で、形容詞と副詞との関連性が取り上げられている。例えば、Sidney Greenbaum, *Studies in English Adverbial Usage* (London: Longman Group Ltd., 1969), p. 7 を参照せよ。

- 4 Ray S. Jackendoff, *Semantic Interpretation in Generative Grammar* (Cambridge, Massachusetts: The MIT Press, 1972), p. 54.

- 5 次のような語は、*-ly* で終わりながらも、副詞ではなく形容詞であり、さらに、それに対応する副詞が存在しない形容詞である。

fatherly, costly, etc.

- 6 manner adverbs の伝統的な扱い方に関しては、Jerrold J. Katz and Paul M. Postal, *An Integrated Theory of Linguistic Descriptions* (Cambridge, Massachusetts: The MIT Press, 1964), pp. 136–44 及び、S.-Y. Kuroda, “Remarks on English Manner Adverbials,” *N.S.F.*, XX (1968), 1–24 を参照のこと。

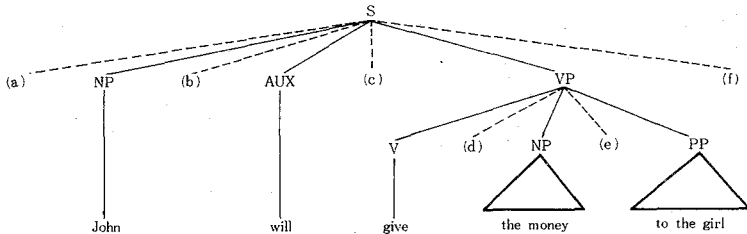
- 7 文副詞の下位分類及び生起環境に関しては、拙稿、Nobuyuki Yamauchi, “Aspects of Sentence Adverbs in English: In Support of Lexical Derivation,” *Doshisha Literature*, XXXII (1986), 140–5 を参照せよ。

- 8 Heizo Nakajima, “The V^4 System and Bounding Category,” *Linguistic Analysis*, IX (1982), 342–7 及び、Nobuyuki Yamauchi, “Aspects of Sentence Adverbs in English: In Support of Lexical Derivation,” 146–53.

- 9 例えば、(21 b) のパラフレーズとして、Their admiration for his music is great. も考えられる。これに関連した議論としては、拙稿、Nobuyuki Yamauchi, “Semantic Shift in manner, Degree, and Intensity Adverbs: An Evidence for Lexical Derivation,” *Studies in Comparative Culture*, III (1985), 85–92 がある。なお、形容詞の predicative と attributive の用法の差異についての詳しい検討は、別

の機会に譲る。

- 10 上で指摘したような、形態論的に関連し合っている形容詞と副詞のペアの意味的相違は、例えば、レキシコンで形容詞と副詞の中立形を設定しておいて、意味解釈規則等で処理するというように、レキシコンから独立して説明されうる可能性もあるかもしれない。
- 11 *Aspects of the Theory of Syntax* (1965) では、厳密下位範疇化と選択制限は、レキシコンに盛り込まれる二つの重要な情報であったが、最近のGB理論では、前者に関する情報は、レキシコンではなく、格理論や θ 理論などの一般的原理で扱おうとする。
- 12 副詞の生起位置に関して、例えば、Keyser (1968) は、“transportability convention”を提案し、文副詞及びVP副詞の生起について一般化を図っている。



この図からもわかるように、例えば、*probably*のような文副詞は、(a),(b),(c),(f)の位置、すなわち、「姉妹関係 (sister relationship)」を保持している位置に生起し、一方、VP動詞は、(d)及び(e)に生起する。Samuel J. Keyser, “Review of *Adverbial Position in English* by Sven Jacobson,” *Language*, XLIV (1968), 368. さらに、これに関連した議論は、Ray S. Jackendoff, pp. 67-9 及び75を参照されたい。また、生起位置に関する広範な調査として、Hans H. Hartvigson, *On the Intonation and Position of the So-Called Sentence Modifiers in Present-Day English* (Odense: Odense University Press, 1969) 及び Sven Jacobson, *Factors Influencing the Placement of English Adverbs in Relation to Auxiliaries: A Study in Variation* (Stockholm: Almqvist & Wiksell International, 1975) が詳しい。

- 13 Greenbaum (1976) によると、“Initial Position”は“before the subject,” “S-V Position”は“between subject and verb, when no auxiliary is present,” “Final Position”は“end of sentence”と定義されている。さらに、否定詞や助動詞などが入った場合も、当然、考察の対象となりうるが、議論の簡略化のために、本稿では、上記に三つの位置に限ることとする。詳しくは、Sidney Greenbaum, “Positional Norms of English Adverbs,” *Studies in English Linguistics*, IV(1976), 5 及び Ran-

dolph Quirk *et al.*, pp. 490–501 も参照のこと。

- 14 Sidney Greenbaum, "Positional Norms of English Adverbs," 13.
- 15 Dwight Bolinger, "Linear Modification," *PMLA*, LXVIII (1952), 1120.
- 16 Initial Position における manner 的読みの例としては、他に次のようなものがある。
Tea dropped steadily from the hem of her dress to the pavement; *sadly* he rubbed it in with his foot.
Sidney Greenbaum, *Studies in English Adverbial Usage*, p.186.
- 17 Toril Swan, "A Note on the Scope(s) of *Sadly*," *Studia Linguistica*, XXXVI (1982), 132.
- 18 Randolph Quirk *et al.*, p. 620.
- 19 Toril Swan, 133.
- 20 Randolph Quirk *et al.*, p. 576.
- 21 *Ibid.*, p. 575 及び Toril Swan. 135–6.
- 23 丸括弧は、抽出されうる副詞の組を表わし、 $\alpha, \beta, \gamma, \delta$ のそれぞれは、変項 (variable) である副詞を表わす。